



自殺志望ニアラズ

シロガネユキ

自殺志望ニアラズ

「自殺志望ニアラズ」シロガネユキ

太田雅史は、自殺志願者ではなかった。

たとえ、彼が、朝から晩まで死ぬ事ばかりを考えており、結末が死に関わる小説や映画を聖書のように扱い、あらゆる種類の死に方に自分を当て嵌め、遠くを見つめて陶醉する事があっても、彼は自殺志望者ではなかった。

無論、周りの人間は、彼を『自殺志願者』もしくは『自殺志望者』と呼ぶのだったが、彼は、そのように呼ばれる事を、極端に嫌がったのである。

雅史は、死への想いを、自殺という言葉で片付けられるのが許せなかった。無論、自殺を考えない訳ではない。実際、彼の想像上のシナリオに於いて、その方法は、大半を占めていたし、彼が、最も格好の良いと考える死に方は、やはり自殺だった。

だが、彼の想像には、自殺の他に素晴らしい他殺や事故死、病死も含まれていた為、自殺という言葉が使われる事によって、一般的に言われている自殺志望者達と、同じ枠組みに押し込められる事が、面白くなかったのである。

「人間の価値は、どれだけ多くの人の記憶に残るかで決まる」と、彼は、事あるごとに、呟くのだった。

都内にある、大手商社ビル12階に、彼の職場はあった。大学卒業後、この会社に就職した雅史は、本社の海外の高級ブランドとの取引をする部署に配属され、二度の海外赴任の後課長代理に任命された。

扱う商品の殆どが、女性向けの物であった事もあり、取引先や同じ部署の人間が皆、外見に気を使ったので、彼も、入社当時に比べると、別人のように身だしなみに気を配るようになっていた。

「おい太田。今日の飲み、どうする？」

突然、背後から、同僚が声を掛けた。洒落たネクタイ、仕立てのいいスーツ、左腕には高級ブランドの時計が乗っている。一時前のバブル時にはよく居たタイプだ。最近は、個人の仕事負担が大きすぎて、皆、以前ほど身だしなみに気を配らなくなったが、合コンがあるとなれば話は別だ。今日はモデルとの飲み会らしい。

「いや、止めておくよ」

雅史は、いつものように断った。飲み会のような場所は、昔から苦手だった。もし雅史の魅力を最大限に生かせる場所があるならば、それは、きっと、飲み会とは正反対の場所にあるのかもしれない。

雅史は幼い頃から口数が少なかった。母親が機関銃の様に話をする為、必然的に彼の話す回数は少なくなっていったし、少年期のある時期には母親の話や厳しい教育にストレスを感じたのか軽い言語障害になり、親戚や近所の者にも心配されたものである。

容姿はあまり目立つようなものではなかった。世間一般で言われるいい男の基準からはかなり外れていたし、彼の

視力はとても悪く、眼を細めて人を見る表情は人を不快にさせた。おまけに眼がとても小さくコンタクトレンズすらまともに入らなかったのも、いつも黒ぶちでレンズの厚い、垢抜けない眼鏡を掛けていた。肌は青白く、頬や鼻には多くの痘痕が出来ていたし、未だ進行中の赤にきびが、鼻のてっぺんと皮の剥けた唇の真下に出来ていた。頬は十代とは思えぬ程酷くこけており、髪が生え際も少し薄くなっていた。

身長は低く、異常な痩せ方をしていた上に頭だけは大きかった。幼い頃はよく『短いマッチ棒』と笑われたものである。

「お前さあ、そんな事ばかり言っていると、またホモだなんだって噂がたつぞ」

同僚は呆れた様に笑った。そうなのだ、つい先日も部長から「まさか女に興味が無いんじゃないのだろうな」とからかわれたばかりだった。三十六歳ともなると、周りの雑音が色々とは煩くなるものである。

「悪い、今日は本当に用事があるんだ。次回こそお願いするよ」

雅史は同僚の誘いをやんわり断ると、ゆっくりと給湯所へ向かった。給湯室は珈琲の香りで満たされていた。雅史は深く深呼吸をすると自分のカップに珈琲を注いだ。

「女ねえ……」

彼はこれまで一度も女と付き合い合った事がなかった。周りの同僚達はコンパで多くの女性と知り合っていたが、彼は今日のようにそういう類の付き合いの殆どを断っていたのである。その内同僚の殆どが結婚し、同期二十六人の内結婚していないのは、残す所彼一人となっていた。

雅史は女との肉体関係の全てを金を用いて経験してきた。金以外の目的で彼に抱かれないと思う女は中々現れなかったし、彼自身も外見でそのように思われるのは無理だと分かっていた。だから彼は女を軽蔑の眼差しで見ようになった。自分が金の絡まない所で女性と恋愛できない原因を、自分の魅力不足ではなく女の傲慢な欲によるものと思う事によってプライドは保たれたのである。

だが現実とは裏腹で、年を重ねる毎に本当の恋愛を経験してみたいという気持ちは高まっていった。

同僚達は恋愛に関する話をする事が多く、特に二十代の頃は酒が入ると必ず社内の子社員の話で盛り上がったものだった。同僚達は目当ての女を如何にしてもものにするかや、理想の女性像を挙げて盛り上がったりしていた。理想の女性と言うと同僚達は女性の顔や体つき、性格等を細かく挙げたが、雅史だけは尋ねられても自分を必要としてくれる女性が居ればと言い留めていた。彼がそのように話すと同僚達は呆れた表情をし、嘘を吐くなと彼を攻めた。

勿論、雅史自身も女性を選ぶ基準がそれだけで良い訳がないという事くらい分かっていた。それ所か一緒に飲んでいる同僚達よりもずっと女に対する理想は高かった。ただ一度も女性と付き合い合った事が無い彼があまりにも高い理想を言えば、同僚達に彼が恋愛出来ないのはそのせいだと陰口を叩かれるのではないかと思ひ込み、それを嫌がったのである。

だから雅史は同僚や知人は勿論家族に対してさえ、どんな女性でもお付き合いできれば幸せだと低姿勢の発言をしていた。

彼の理想像は美人でスタイルが良く、笑顔が素敵で、髪が長く、センスが良く、料理が上手く、子供が好きで、素直で従順、話題が豊富で雅史を飽きさせず、プラス思考で、協調性、柔軟性があり、自分の両親の面倒を見てくれ、

雅史をこよなく愛し、尊敬し、他の男には見向きもしない……という他人が聞いたら呆れるのが間違いない程高いものであった。

今迄、出会いが全く無い訳でも無かった。入社当時に限っては合同コンパに参加したし、出張先で女と知り合う事も有った。その中には彼の醜い容姿ではなく彼の細やかな内面を感じ取り、受け入れる意思表示をしてきた女も居たが、彼の雲のように高い理想に適った女は居なかったのである。

そんな理由からか、彼はブラウン管の中の幼いアイドル達に情熱を注ぐようになった。

彼の鋭い目に留まった純粹そうな若手アイドル達のブロマイドは、丹念にレタッチをされた後、彼所有のアイドル専門ホームページギャラリーに飾られ公開された。彼にとってアイドル達は外見を問わず常に笑顔を見せてくれ、見たくない部分を見せないでくれる理想的な恋人であった。彼は又、それらのブロマイドを使って空想上の恋人を作り上げ、その女性との恋愛小説を作りホームページで公表していた。

だが一度でもそのアイドル達の恋愛スキャンダルが発覚すると、そのアイドル画像と裏本画像とを合成し、修正を加えて自慰行為の想像コレクションに加えるのである。コラージュを作る時、彼は神になれた。彼を裏切ったそれ迄の恋人達は皆、彼の手によって服を剥がされ、様々な形で陵辱された。そして飽きられる迄使われた後、それらのアイコラ画像はアダルトサイトにある雅史の裏ホームページで公開されるのである。

彼はインターネットの中では別人であった。ネット上では女性にとっても好かれた。自己紹介をする際は自分の容姿を偽ったし、文体も積極的な男を匂わせる過激なものにしていた。彼は恋愛のホームページに遊びに行っただけは自らを偽り、それに夢中になる女性を弄んで楽しんでいたのである。勿論現実に女性と会った事はなかった。

雅史の持つアイドルのレタッチギャラリーが誰でも入れるホームページだったのに対し、裏のホームページであるアイコラギャラリーは会員制であったのだが、そこに入会するのに金は要らなかった。ただ彼のホームページにある掲示板に頻繁に感想を書き込みさえすれば良かったのである。入会したい男達は彼に入会願いのメールを書き、サイトに入るパスワードを貰った。彼は毎日会社から帰るとメールをチェックし、会員にしてもいいと判断した相手にのみパスワードを載せたメールを送っていた。

オフィスにある丸いシンプルな時計は16時を回っていた。今日はいつもに比べて仕事が楽だった。

「今日は定時に上がって、家で夕飯を食べるか」

雅史はそんな風に思いながら大きく伸びをした。この所残業続きで夕飯は出前かカップ麺ばかりだった。久々の定時上がりは嬉しいものだった。

予想通り仕事は定時に終わった。帰り道、ふと通り過ぎたデパートを見て、同居する母に何か甘いものでも買って行ってやろうと思立ち、小豆モナカを買おうと、雅史はそのまま帰宅した。

リビングでくつろいでいた母親に土産を渡すと、自分の部屋に入り、パソコンの電源を入れる。いつものようにアイコラ入会願いのメールをチェックしていると、不思議なメールが届いているのに気が付いた。

「はじめまして、私は訳があってアイコラを集めている十八歳の女の子です。 あなたのアイコラを他のホームページで見かけ、あまりの精巧さに驚きました。私自身はアイコラに興味があった訳ではないのですが、私の彼氏がとても興味があり、彼はパソコンを持っていないので私が代わりに集めています。私自身もまだパソコン歴二ヶ月なので、ネ

ット上でのマナーとか良く分からないのですが、ホームページにお邪魔する際は何か掲示板に書き込みをしようと思っています。もしよろしければ会員にして頂けないでしょうか。宜しくお願い致します。 伊納 直」

雅史はそのメールを何度も読み返した。知り合いの他のアイコン職人達から、男が女を偽る（通称ネカマ）悪質な悪戯が流行っていると聞かされていたので、ついに自分の所にも来たかと思ったのだが、万一の可能性を思うと無視する事が出来なかった。痛いぐらいの好奇心に負け、結局本当に女性なのかどうなのか確かめてから、パスワードを送るかどうかが決めようという結論に達した。

数日後パスワードを彼女に教える迄に、雅史と直は二十三回ものメールの遣り取りをしていた。雅史は彼女のメールを受け取る度に、価値観の違いに驚いていた。男の為に、その男の自慰行為の道具を女が用意するという事など、雅史のそれ迄の男女間の想像とはかけ離れていた。だが彼女は現実の性行為に馴染めないからその穴埋めなの、とさりりと答えていた。

遣り取りを続ける内に雅史は彼女に強く惹かれるようになった。パスワードを渡した後も彼女とのメールの遣り取りは続き、日に八回メールを出した時もあった。次第に雅史は他人との会話において、滅多に口に出さない感情すら出すようになっていた。

いつの間にか彼女を騙して反応を楽しもう等という考えは、雅史の頭の中からすっかり抜け落ちており、彼女の返答や反応、そして話題は雅史を夢中にさせ、想像の殆どがそれに征服されていた。

だが遣り取りを続ける内に、雅史は漠然とした不安に襲われるようになっていた。彼女はメールの中で自分の置かれている環境や出来事を事細かく書き綴り、雅史が話題を振ればきちんと返答や感想を述べていた。

しかし彼女は自分の話になると全く感情を表さなかった。どんなに辛そうに感じる境遇にあっても楽しそうな出来事があっても、彼女はそれらを淡々と書き綴るだけであり、どのように感じたとは一切書かないのである。

反対に雅史の方は自分の感情を事細かく書き綴った。彼女に少しでも自分の感情の動きを把握してほしいと願ったし、自分の性格や考えに自信を持っていたので、そうする事によって彼女が自分に惹かれるのではないかと思ったからだ。

彼女は雅史の願い通り雅史の感情の動きを把握するようになったし、彼の考えに理解を示していた。勿論イエス、ノーで彼の意見に反応しているだけではない。彼女は雅史がどんなに繊細で理解し難い感情を表現して理解を求めても、その状況に最も合った例を即座に見つけ、その例を上手く用いて彼の感情を代弁した上で、理解を示すのであった。雅史はそれらを見る度、彼女の年齢を疑わずにはいられなかった。

だが雅史にとってそのような事はどうでも良くなっていた。最初、年齢の若さに惹かれてはいた事は事実だったが、今となっては寧ろ彼女が高校生である事が嘘であって欲しいとすら思っていた。彼女と同年だった頃の自分の精神年齢と彼女のそれとを比べると、顔から火が出るほど恥ずかしかったし、三十六歳にもなって十八そこそこの少女に自分の心理を簡単に読まれてしまっている事、そして自分が彼女の心理を把握していない事に焦りを感じていたからである。

彼女に強く惹かれているのは事実であったが、果たしてそれが恋なのかどうかは雅史には分からなかった。雅史は度々自分の彼女に対する感情はどのような種類に属するものなのか考えていた。実際彼女からメールを貰うのはとても嬉しかったし、彼女の容姿を想像し、自慰行為をするとアイコンを使うよりも更に強い快楽を得る事が出来た。彼女と暮らして彼女が得意な料理を食べさせてもらう事を想像して心が和んだり、彼女と彼女の彼氏との遣り取りを苦しい程嫉妬しながら聞いていた。

今迄、人に惹かれる様な事があると、それは全て相手の容姿であったり雰囲気であったり性格であったり、と目に見えたり感じたりする事が出来る相手の中の何かに対する感情だったのに、彼女に対する感情は今迄のものとは全く異なり、惹かれる対象が漠然としすぎるのか又は数が多すぎるのか、それが今まで思い描いていた恋の概念とは余りに違いすぎて恋と呼ぶ事が出来ないでいたのである。

雅史は彼女の容姿が美しくあって欲しいと願う反面、万一目も当てられないような醜い容姿であっても彼女に対する興味が極端に薄れることは無いだろうし、その方が気が楽だとすら思うようになっていた。そして彼女が人間的に汚い感情を露わにするような事があっても、今の彼にとってそれは愛らしい事に感じられるだろうと思え、寧ろ願わしい事にすら思えるようになっていた。

彼は彼女の謎めいた心の森の奥に、今迄に彼が見た事も無いような思考の宝石があるか、若しくは手の付けられないような記憶の掃溜めがあるのではないかと睨んでいた。そしてそれがどちらであるのか自分の目で確かめたいという感情が、彼の彼女に対する興味の殆どを占めているような気がしていた。

だが結局何回その事を考えようが何時間その事を考えようが、彼は最終的に納得のいく感情を見付ける事が出来なかった。

彼女との出会いから一年が過ぎようとしていた。直はこの一年の間に高校を卒業し、小さな健康食品のメーカーに就職しており、雅史もそれまで所属していた海外ブランドを扱う部署から、社内でも比較的楽な国内の穀物を扱う部署へと移動になり、煩雑な仕事から解放されていた。互いの生活環境の変化に伴ってメールの回数は減っていったが、それでも毎日、朝と夜と計二回の遣り取りは続いていた。

その日、直は早朝のメールで前日に起きたニュースについて意見を求めてきた。虐めに耐えかねた小学校六年生の男子生徒が、校舎の屋上から飛び降り自殺を凶ったという事件の事であった。だが幸か不幸か少年は死ぬ事が出来なかった。校舎に沿って生えていた大きな桜の木がクッションとなり、軽症で済んでしまったのである。ニュースでは信じられないとばかり口走る少年の母親のインタビューと学校側の記者会見が放映されており、コメンテーター達が口を揃えて良かった良かったと言っていた。

直は少年の事を考えた上で、あの少年は生きていて良かったと思うかと聞いてきたのである。雅史は即座に死ななくて良かったと返答する事にした。恐怖の対象から逃げる為の自殺は彼の美学から外れていたし、自殺未遂をした事によって今後少年の周囲は原因を追求して現状を改め、少年は過ごしやすい環境を得る事が出来るかもしれない、それに死ぬにはまだ若過ぎるのではないかというのが理由だった。

だがメールを書き終え読み直してみると、そこにはテレビのコメンテーターが言っている台詞と代わり映えしない言葉が並んでおり、彼はそれを送信するのを躊躇した。

暫く考えた末、その台詞に重みを増す為に自分の死に対する説明を添える事にした。彼女なら理解してくれるだろうという自信があったのだが、念の為少年時代の感情の変化をくどい位に分かり易く説明した。結局メールはとても見苦しいものになってしまったが、誤解を受けるよりはましと思えばそれを送信した。

彼女からの返事は終業時間ギリギリになってから届いた。緊張しながらメールを見ると彼女の反応は意外なものだった。彼女は文の冒頭から自らを自殺志望者であると名乗ってきたのである。その上ネット上で知り合った自殺志望者仲間とオフ会迄行っていると書いてある。

彼女の文の長さは相変わらずとても短いものだった。彼女はいつも雅史の三分の一程の量しか返事を書かず、雅史

はメールを受け取る度にそれに対して寂しさと苛立たしさを感じていたが、今回はそのどちらの感情よりも、恥ずかしさの方が先に立っていた。

メールを読み終えると、どっと疲れが出たような気がした。雅史はデスクに置いてあった冷めきったコーヒーを一口啜ると、ため息を吐きながら顔をデスクに伏せた。

『一体僕は彼女に対して何を求めているのだろうか……』

雅史は自分の感情や思考を彼女にいつも受け入れてもらっていた。それはとても心地のよい事であったし自分の内面に対する更なる自信にもなった。しかし受け入れられるという事は同時に、自分の内面がそれ程特別ではないという事の表れでもあるような気がしていた。彼は彼女の前では何処にでも居る一人の男でしかなく、それが雅史の揺るぎ無かった内面に対するプライドを、幾度となく傷つけられてきたのだった。だから雅史は彼が彼女に尊敬の念を抱かせる最終的な手段として、死に対する考えをメールに綴ったのである。

だが今になって考えてみると、その考えも何処か彼の本当に望んだ結果ではないように思っていた。雅史は疲れた頭をさらに酷使するかのよう自分の感情を見つめていた。確かに雅史は彼女に尊敬される事を望んでいた。彼女から尊敬されて、恋愛感情を抱かせたかった。だがそれよりも更に彼にとって大事な事があった。遣り取りを長く続けているにも関わらず、未だ彼女の内面を理解出来ずにいるという事、それが一番雅史にとって重要な事であるように思っていたのである。

雅史は常に自分の言動が直に稚拙だと思われてはいないか気にしていた。彼女が自分に感情を示してこない原因がそこにあるのではないかと思っていたからである。彼はただ彼女に心を開いてもらいたいただけだった。彼女が心を開いてくれる事が、傷つけられたプライドを修復し、再び自分が特別な人間であると思う事が出来る唯一の方法だったからだ。

雅史は脱力した。

雅史の用意した思想の切り札は何の役にも立たなかった。彼はもう無意識ではなく意識的に彼女との関係に於いて敗北を認めざるを得ないのかもしれないと感じていた。

家に帰ってからも何もする気になれなかった。雅史は用意された夕食も食わずに自分の部屋へ直行し、部屋に入るとスーツのままベッドに倒れ込んだ。

数時間ベッドの上で色々な事を考えた。色々といってもその中には直が関わらない回想や想像はない。出会いからほんの一年しか経っていないというのに、もう随分と長い間彼女との関係があったような気がしていた。うっすらと霧のかかった思考のフィルムは、壊れたレコードのように何度も同じ映像を繰り返し映し出していた。雅史は逆らう事無くそれを見つめていたが、突然腹が減り始めた事に気が付き居間へと向かった。

居間には妹と母親の姿があった。妹は二十六歳の時に六歳年上の針灸師と結婚し、現在は六歳になる一人娘が居る。結婚してからは正月以外に見かける事がなくなっていたので驚いたが、それを態度で表現出来る程の元気は今の雅史に無かった。妹は雅史の疲れきった顔を見ると「相変わらず冴えない顔をしてるわね」と呆れたように言った。

母親と妹が子育ての話で盛り上っている同じテーブルの端で、雅史は残っていたスズキの煮付けと白米を無言で食べ、そのまま何も話さずに自分の部屋へと向かった。自分の部屋のドアを開けた瞬間、直への返事をまだ書いていない事に気が付いた。時計は既に二十二時三十分を回っていた。通常であればこの時間帯にはメールを送っているのに、直はきっと心配しているであろう。

だがパソコンを立ち上げメールを作成しようとする、何を書いていいのかわからなくなってしまった。食事を取ったせいか、先程ベッドに寝転んでいた時よりは気分も体力も戻っていたが、メールを書く気力はまた別物なのである。仕方がないので、疲れていてメールを書く事が出来ないとだけ書いたメールを送信して、明日気分が晴れてからその分の返事を書く事にした。送信したついでにメールチェックも行くと、メールが一通届くようだった。

アイコラの入会希望者か何かであろうと思いながら開封すると、意外にもメールの送信者は直だった。いつもと異なる時間帯に少し戸惑いながら中身をざっと見ると、そこには今までの直のメールからは想像し難い量の文字があった。

見ると、直が以前参加した自殺志望サークルのメンバーについての説明と、普段どのような事を彼らと話すのか等が延々と書かれていた。そして文の最後尾には、雅史の死に対する思いがとても素敵なお考えに思えるので、いつか自分の自殺志望サークルの仲間に雅史を紹介したいとあった。

雅史はメールを何度も読み返した。最初、あまりに想像外の出来事に、自分が夢でも見ているのではないかと思った。想像外というのは彼女が書いてきた文の量や時間帯ではない。彼女のメールに初めて、感情らしきものが感じられた事であった。

雅史は自分の内臓が嬉しさから来る緊張と興奮で痙攣しているのを感じながら、彼女の長い文章を何度も繰り返し読んでいた。直ぐにでも返事を書きたい衝動に駆られたが、少し前にメールが書けないと書いてしまった手前、直のメールに対する返事を書くことは出来なかった。仕方がないので雅史は明日どのように返事を書こうか心を躍らせながらパソコンを閉じた。

そして家に帰ってきた時とは正反対の感情を抱きながらベッドに飛び込むと、先程と同じように仰向けになって直との事を考え始めた。思考の霧はすっかり晴れあがり、次から次へと彼女との楽しい遣り取りをする、都合の良い自分の映像が脳裏に浮かんで消えていった。既に彼の頭の中には、数時間前まで考えていたようなマイナス思考的想像が影も形も無くなっており、時折意味の無い言葉を発しながら伸びをしたり、欠伸をしたりしていた。

雅史は暫くそのような行動を繰り返した後、居間に居た妹に何か気の利いた言葉でもかけてやろうと思立ち、軽快な足どりで部屋を後にした。

十月上旬ではあるがまだ暖かく、心地よい風がほのかに色づき始めた木々の葉を揺らしていた。

雅史は渋谷の町に居た。日曜日に晴天が重なり町は若者で賑わっていた。ここで待ち合わせをするなど、一体何年振りだろう。考えてみれば大学を卒業してから、この町で待ち合わせをしたり遊んだりする事は殆ど無くなっていった。遊びとはいっても、その当時から若者がしそうなカラオケに行ったり買い物をしたり飲みに行ったりするものではなく、一人でデパートの催し物の絵画を見に行ったり、映画を見に行ったり、裏ビデオ屋を探索するだけだった。

町をぐるりと見回すと、ビルに備え付けられている巨大なポスターの広告とビル数階分もありそうな巨大テレビが一際目立っていた。名も知られていないようなレポーターがスタッフらしき数人を引き連れ、町行く女子高生達にインタビューを試みていた。雅史の隣にはティッシュを配る若者や、片端から若い女性に声をかけるスーツを纏った妖しい勧誘男達が居た。

今日は直と初めて会う約束をしていた。二週間前の自殺の話を引きかけとして二人の仲はますます親密なものとなり、最近雅史は直のメールから自分に対する恋愛感情のようなものさえ感じ取れるようになっていた。そして今日は、彼女の所属する自殺志望者サークルである死者会（しこうかい）の会合に参加する事になったのである。

サークルのメンバーは男六人女二人で構成され、一番年長者は二十七歳であり一番最年少は高校一年生の少女だと聞いていた。直はサークルのメンバーについて、ここのところメールで詳しく書き綴っていたが、雅史はそれ程興味が無かったのでそのような部分は流し読みをしていた。だから急に直と死考会のメンバーと会う事になって焦り、それ迄のメールを何度も読み直しながら、メンバーの事について受験勉強で英単語でも覚えるかのようにはたすら丸暗記したのであった。

約束の時間迄殆ど時間が無かった為、小走りで約束したハチ公前へと向かう。ハチ公前に着くと、指定された缶コーヒーを手に持った男女が既に集まって居た。雅史はその光景を見て密かに恥ずかしさを感じながら、バックの中から彼らと同じ缶コーヒーを取り出した。グループに近寄り自己紹介をするとリーダー的な男が中心となり、メンバー達が感じ良く受け入れてくれた。雅史はすかさず直を探した。女性はその場に二人いたが雅史は一目で彼女が分かった。と同時に彼の中に大きな衝撃が走った。

『何と美しい娘なのだろう……』

美しく強さの感じられる瞳、真っ直ぐに伸びた眉、指でなぞりたくなる程美しい湾曲を描いた細く高い鼻、薄く小さな口元、白いキャンバスに一輪の可憐な薔薇が描かれたような頬、真っ直ぐ伸びた黒く艶のある髪、女性らしい華奢な体つき、全身から滲み出る淑やかな色気。今まで作ってきたどのアイコン素材よりも優れた素材に見えた。

直はにっこりと微笑むと雅史の傍に寄り名を名乗った。彼女の低く落ち着いた色気のある声が、雅史を直一層緊張と混乱の渦へと引きずり込んでいった。雅史は直の顔から全く目を離す事が出来なかった。彼女の瞳は太陽の光を反射しながら輝く、美しく澄んだ湖面のようだった。

彼女はとても十代には見えなかった。顔立ち自体はそれほど大人びたものではなかったが、彼女の存在感と落ち着きは顔立ちの幼さを感じさせず、少し前まで高校生だったとは到底考えられなかった。更に薄手でびったりとしたブイネックの黒いセーターと、ダークグレイのワイドパンツを合わせたファッションが彼女を尚一層の事、大人の女性に見せていた。

直は雅史にサークルのメンバーの紹介をしてくれた。簡単な紹介だったが前日までの必死の丸暗記が功を奏し、雅史はメンバーの顔と名前を即座に覚える事が出来た。

まず雅史の左側にいた男は飯田 道人と言い、細身長身で髪が茶色く後ろに一つに束ねていた。手足が長く、男なのに肌が透き通るように白く美しかった。物腰は柔らかく同性愛主義者のような印象を受けた。

彼の隣には彼とは正反対の醜い男が居た。武田 仁であった。まだ十代だというのに酒を飲みすぎた中年男のような腹をしており、顔には幾つもの赤い吹き出物があった。充血した白目がちの目は気味が悪かった。その上、彼の体から放出された汗の酸っぱい匂いは雅史の鼻を直撃し、雅史はこの上ない不快感を覚えた。

彼の隣には雅史と同じような体型の男がいた。直の話では彼が最年長だとの事だった。どこことなく雅史と系統が似ているような気がしたが、雅史より筋肉質で髪もしっかりと生えていたし、目も標準並の大きさだった。名前は宮川 タケルといった。直がメールの中で最も個性的な人と言っていたので、どれ程強烈な人間なのかと思っていたが、余りにも普通の人間だったので少し残念に思った。

直の隣に立っていた最年少である川本 渚は、肌の色が異常に黒かった。右の頬には直径五センチ程もある大きな染みが出来ていた。モヘア素材の派手なショッキングピンクの半袖セーターを着、こげ茶の皮で出来たようなミニスカートを履いていたのだが、品が無く顔や体型と合っていなかった。おまけに中年女性のような口調で、敬語を全く使わ

なかった。

渚の隣には貫禄のある大男がいた。大川 又三郎である。日頃からかなり体を鍛えているようで首が太く、必要以上に袖をめくり上げて自慢の腕を見せていた。

メンバーが揃った事を確認すると、最年長の宮川は雅史に気を使いながら直が前もって予約していた店に向かおうと切り出した。皆それぞれに会話を楽しみながら店へと向かった。

店はアイルランド系だった。夜や土日祝日にはヴァイオリンやギター等のケルト民謡を聞く事が出来る所で、使い込んだような木のテーブルや、陳列された骨董品がとてもいい味を出しており、明る過ぎない照明と微かに聞こえるBGMは居るものをとてもリラックスさせた。一行は店の一番奥にある大人数用の丸テーブルへと案内された。

直が雅史と全く話の出来ない場所に座ってしまい、渚と話すことに夢中で既に雅史の存在を忘れているかのように思えるので雅史も左隣に座った美少年飯田に話し掛けようと思ったが、彼は宮川との話に盛り上がっているようだったので、仕方なく右隣に座っていたブ少年武田に話し掛ける事にした。

話し始めて十五分経った頃になってようやく飲み物が届いた。いつの間にか誰かが勝手に注文をしたようで全員に同じグラスに入ったビールが手渡された。誰が指揮を取る訳でもなく皆自然に乾杯をし、冷えたビールを飲み始める。

雅史は酒が好きでなかったのに、周りの様子を伺いながらビールを少しだけ口に含み、直ぐにグラスを置いた。皆美味そうにビールを飲んでいたが、一番美味しそうに飲んでいたのは未成年女性二人組みだった。

二人を微笑ましく見つめていると、武田が話し掛けてきた。武田は第一印象だけでなく、知れば知るほど気分を悪くさせる男だった。酒を飲んで体温が上昇したのか、彼の体からは会った時より更に強い悪臭が放たれており、その悪臭はウェイターが持ってきた焼きたてチョコリソアの香りと混じって、雅史をこの上なく不愉快にさせた。

おまけに会話も自己中心的で自分の事ばかりひたすら話し、雅史が相槌を打たなくとも全く気付いていないようだった。更に最悪なのが彼の笑顔だった。彼は笑う際、白目がちの目を更に見開いた。興奮して開いた鼻の穴は細かく乾いた鼻くそが見え隠れし、大きく開けられた口の中では粘着質な唾液が糸を引いていた。

雅史は不快感を顔に出さないように振舞うのが精一杯だった。武田に自分が不快感を抱いている事を知られるのは一向に構わなかったが、直に見られた時に年を取っている割に懐の狭い男だとは思われなくなかったのである。

一時間と少しの間、武田は自分が自殺願望を持った経緯を延々と語っていた。彼はどのような所に所属しても必ず虐めに会うのだという。それが何故なのか彼には分からなかったのだが、最近母が家に招いた心理カウンセラーに相談した所、それは彼の類稀なる頭の良さに嫉妬しての行為ではないかと言われたようだった。雅史はその心理カウンセラーに無性に腹っていた。

『やっかみが原因だって？ 笑わせるな。虐めに会うのは体から漂う悪臭のせいだろうが。しかも顔が悪くて臭くて、その上性格まで悪いとなれば虐められない事自体奇跡的じゃないか。何とも馬鹿馬鹿しい』

嫌味の一つでも言ってやろうかと思ったが、その心理カウンセラーのお陰で最近精神的に立ち直ったばかりだ、と武田が涙目で語るのを聞いて雅史は我慢する事にした。

「僕はね、去年の今ごろ本当に死のうと思っていたんですよ。実際色々な死に方を想像して、数え切れない程の遺書を書いてたしね。ほら、学校の虐めに耐えかねて自殺するとたまにニュース番組で遺書が公開される事がある

でしょ？ 僕が衝撃的な死に方をすれば、僕を虐めた奴らは、何故そんな酷い虐めをしたのかと親共々世間の冷たい視線を浴びて、肩身の狭い思いをしながら生きていかななくてはならなくなるでしょ？ 遺書は三つ用意する事に決めていたんですよ。一つ目は学校用、何故学校側は何も対処してくれなかったのかって奴ですよ、二つ目は家用、まあこんなになって御免なさいって奴ですね、でもって三つ目が警察用ですね、万が一学校側が事実を握り潰そうとした時の為ですね。

死に方も色々と考えたのですが、やっぱりビルから飛び降りるのが一番かなって思ったんですよ。溺死も交通事故も首吊りも、死ぬ迄に時間が掛かるでしょ？ あれは辛いですね。僕は特別に容姿が良い方って訳でもないから、僕の苦しんで死んだ時の顔つきなんて見たら可笑しさに吹き出しちゃう奴とか出てきちゃうと思うんですよ。そうなるにせっきやくシリアスに締めようとした僕の努力が水の泡でしょ？ だから多少掃除する人に迷惑が掛かっても飛び降り自殺が一番シリアスになるかなってね。

それで実際色々なビルを見に行ったんですけどね、これがまたじっくりこない物ばかりなんですよ。なるべく関係の無い人に迷惑を掛けないように死にたいですからね、そうなるに立地条件が厳しくなってくる訳ですよ。できれば築数十年経っていきそう、寂れて味のある、ほら、蔦なんかびっしりと生えちゃってる奴なんていいと思いませんか？ ああいうのが良かったのですが、なかなか見つからないんですよ」

アルコールが回り始めたのか武田の口数は更に多くなり、声までも大きくなってきていた。雅史は店に来ている他の客や食べ物を運んでくるウェイターに彼の声が聞こえやしないかと、はらはらしながら武田の話聞いていた。

自殺志望ニアラズ

武田から開放されたかったので雅史はさり気なくトイレに向かった。暫くしてトイレから戻ると渚が武田の餌食になっていた。渚の表情が余りにも不快感を表していたので少し気の毒に思ったが、一人になった直と話すチャンスが巡ってきたので、雅史は迷わず彼女の近くへとイスを持って移動した。

直は雅史が来ようとしている様子に気付くと、自分の隣に少し隙間を作ってくれ、雅史のイスのスペースを確保してくれた。直の隣に座った瞬間、無事武田から開放された安心感から疲れがどっと出た。

「お疲れさまでした。彼、手強かったんじゃないですか？」

直はくすくすと笑いながらそう言った。

彼女は雅史が武田の話にうんざりしながらも努力して聞こうとしている姿を、見ていてくれたようだった。途端に嬉しさが込み上げて来る。

「まあね」

雅史は態と悪戯っぽい笑みを浮かべながら彼女の顔を見た。武田の軽い悪口を共通の話題とする事によって、仲間意識を高めてみようと思いついたのである。

しかし話し掛けようとした瞬間、彼女の方が先に口を開いた。

「でも、武田君って太田さんに似てると思ったんだけどなあ」

雅史は一瞬凍りついた。彼女が冗談を言っているのか本気なのかが分からなかった。

「そ、それって性格がって事？ それとも……」

「うーん。何となくなんですけどね。気に障ったのなら御免なさい」

「あ、いや、そんな事ないよ」

直は雅史が傷ついた事に気が付いたようで必死に弁解をしていたが、雅史の耳には入らなかった。直が話題を変え、さりげなく雅史の気を紛らわそうと努めているようだったので、雅史もそのような直を愛らしいと思い、何とか顔から不快さを消そうと努力していた。

暫く話した後、直は雅史を美少年の飯田、筋肉男大川、そして普通人宮川に紹介した。

雅史の隣に居た宮川は着ているトレーナーもチノパンも黒、深くかぶった帽子も黒、靴下も靴もバッグも黒だったのと、ぼそぼそとはっきりしない口調からとても暗い人間に見えた。どこか東北系の訛りのある口調だった。雅史は彼の後ろに死神でも憑いているのではないかと感じた。

それとは対照的だったのが美少年飯田だった。彼は身に付けている洋服が白っぽい物であったせいか、何か特別な

守護霊でも憑いているかのように光輝いて見えたのである。

飯田は少し力を抜いたような仕草で自己紹介をした。声は細く少し高めだった。話し方も洗練されており、言葉を一言ずつ選んで話すような口調は好感が持てた。

最初に話掛けてきたのは飯田だった。彼は直から雅史の事をよく聞いているらしく、雅史についてかなり知っている様子だった。勿論雅史の死に対する感情についても、ある程度知っているようだった。

飯田は右頬に手を当てながら、うっとりとしたような目で雅史を見つめると、雅史の死に対する思いがとても素敵なので、是非そのような死に方で最後を遂げて欲しいと言いながら妖しく微笑んだ。

雅史は飯田に彼自身の自殺願望の内容について尋ねる事にした。それがここでのマナーである事を感じ取ったからであった。飯田は含み笑いをしながら遠くを見つめるような瞳をすると、まるで海水の流れに身を委ねる生き物のような独特の動きをしながらゆっくりと話を始めた。

飯田は幼い頃からとても容姿が美しい少年だった。母親も父親も特別な美男美女であった訳ではなかったが、両親の顔や体の良い部分だけを与えられて彼は生まれたのであった。

外を歩けばすれ違う大人たちの視線を集め、数え切れない程の人に天使のようだと言われ褒めちぎられた。

そしてそれは彼が成長してもなお続いていた。昔ほどあからさまに褒められることは無くなったものの、相変わらず大勢の視線を集めていた。又、容姿だけでなく彼には出来ない事が無かった。何をやっても人に劣る事など無く、特に芸術分野に関しては幼い頃から頭角を見していた。だから小学生の頃から自分が特別である事に気付いていたし努力というものは庶民のやる事であると決め付けていた。

そのような恵まれた道を歩んできた飯田も、中学校に進学した頃になって初めて深刻な問題と向き合う羽目になった。

彼の美しく白い透明な肌から二本の太い陰毛が生えてきたのである。最初それらが短いうち飯田はそれが何なのか理解出来なかった。いや、それ所かそれらが三センチ位に成長するまで、そこに生えている毛である事すら気が付かなかった。自分のきめ細かい肌からそのような黒々とした毛が生えてくる等と夢想だにしていなかったもので、髪の毛が肌に付いたと思って、或る日躊躇いもなくその毛を払い退けようとして初めて、それらが彼の陰部から生えてきている物だと知ったのである。

彼の思考は止まった。一本の毛を摘んだ親指と人差し指は震えていた。

突然飯田の脳裏に、同級生達が生えてきたか生えてきていないか話をしている風景が浮かんできた。そして続けざま小学校高学年の時の林間学校で一部のクラスメイトが生えている男子生徒を見つけては、からかっている風景も思い出した。

飯田は頬を赤らめながら二本の陰毛を手で塗り取った。その後飯田はクラスメイトが陰毛の話をする際、こっそりと耳を傾けるようになった。ほとんどの男子生徒が既に生えている様子だったが、飯田は自分が他の人間と同じように醜いものを与えられた事に対し屈辱感を抱いていた。

雅史は胃がむかつくのを感じていた。謙遜が微塵も感じられない飯田の口調は雅史を不機嫌にさせた。他のメンバーはもう慣れていた様子で、飯田の話を聞き流しているようだった。雅史は憎らしげな表情で飯田を見据えていた。

「太田さん、太田さんは怖いものってありますか？」

突然、飯田が遠くを見つめながら雅史に話し掛けた。雅史は返答に困った。飯田が求めているのは死というテーマに沿った返答であろうと分かってはいたが、彼が受け入れそうな怖い存在は即座には思い当たらなかった。

雅史は苦し紛れに権力、特に金の力かなと小さな声で返答した。飯田は相変わらず遠くを見つめながらへえと興味なさそうに呟いた。端から雅史の話等聞く気はなかったようだった。その態度に雅史はますます腹立たしさを覚えていた。

「僕は……老いが怖いんです」

飯田は雅史を話相手でなく、彼の美しい演技に魅入る観客の一人としてしか考えていない様子で話を続けている。

「女みたいな事を言うんだな」雅史は吐き捨てるように言った。

飯田は雅史の目を見た。一瞬嫌味が過ぎたかと少しひやりとしたが、飯田の瞳には怒りが感じられなかった。それ所か夢を見るような無垢な色の彼の瞳に、雅史は思わず吸い込まれそうになった。

「僕は人生において一番美しく死ぬる機会を逃してしまったのです。今の僕もこれからの僕も小学校の頃の僕より美しくなる事はないのです。あの頃僕の肌はもっときめ細かいものだった。あの頃僕の足はカモシカのようなようだった。あの頃僕の髪は栗色で細く艶のあるものだった。あの頃の僕は匂わなかった。そしてあの頃の僕には毛が生えていなかった。

今の僕はきっと数万人に一人位の美しい肌を持っている。脚の形だってしなやかな筋肉の付いた美しいものだと思います。髪の毛は黒く太いものとなったとはいえ、艶はあります。でも自分の基準は過去の自分の美しさなのです。どのように周りが褒めてくれても僕の耳には入りません。もし僕があの方に死んでいたら、僕は永遠にあの美しさを保って人の記憶の中に居る事が出来たのです。だが今はそれが出来なくなってしまった」

雅史もいつの間にか宮川や直と同じように彼の話を聞き流していた。彼を可哀そうな人と位置付ける事によって、苛立たしさから開放されようとしているのであった。

飯田は少しの沈黙の後、僅かに怒りを込めた口調で話を再開した。

「でも両親も教員達も大人達は皆、僕がこの話をすると決まって人間は顔じゃない、素晴らしい生き方をしながら歳をとれば、また別の魅力が備わってくると言うのです」

「ふーん」

雅史は飯田の両親や周りの大人に少し同情しながら相槌を打った。

「馬鹿馬鹿しい。そんなものは容姿の悪い奴らが己のコンプレックスから逃れる為に抱く、感情の擦り替えに過ぎない事に彼らは気付いていないのです。僕は彼らとは違う。僕には美しさもあるし、知識もある。芸術の才能もあるし、運動能力も優れている。彼らの持つ理想と僕の持つ理想とでは見ている次元が違うのです。僕は完璧でいたい。そして僕は死ぬ機会を見過ごしてしまったのです。でも生き続ければ僕はもっと醜く老いていく」

『早く死んじまえ』雅史は心の中で彼を罵倒し、目の前にあったフレンチフライを乱暴に口に入れた。

「まあ、何れにせよ死ぬ勇気が無いって事でしょ？」

突然、直がびしゃりと言い退けた。雅史ははっとなり顔を上げ、直と飯田の顔を交互に見た。飯田は急に夢から覚めたような表情をしながら黙り、疲れた様に微笑んだ。

五人は暫く沈黙のまま黙々と近くにある食べ物へと手を伸ばしていた。

気まずい雰囲気の流れの中、雅史は何とかこの場の雰囲気を換えようと、自分から違う話題を持ち掛けようとした。だが幸い宮川が惚けた口調で冗談を飛ばしてくれた為、嫌な雰囲気はそれ程長く続かなかった。

宮川は渚の自殺志望理由を冗談を交えながら話し始めた。雅史も直も飯田も彼のユーモアある話し方にいつの間にか惹きこまれ、自然と笑みが浮かぶ程になっていた。話題が大川の自殺志望動機に及ぶと、大川は待ってましたとばかりに体を乗り出してきた。

「自分はどうせ死ぬなら人を殺してからがいいと思うんっすよ。死に方は勿論割腹自殺っすね。やっぱ、格好いいじゃないっすか。世の中ムカツク奴が多すぎるし、大量に殺して死んだら、自分は英雄になれると思うんですよ。万一上手く殺せなかったり、納得のいく殺し方が出来なくて失敗したって思っても、どうせ今の法律なんて数年入ってれば出てこれるしさ、あ、自分のダチもそうでしたしね、成功するまで何度だって有名になれるチャンスはあるんっすよね。まあ見ててくださいよ、数年後にはすげえ有名人になってやりますから」

大川は舌足らずの口調で話しながら、艶の全く無い茶色の長髪を何度も掻き揚げていた。

雅史は大川の考え方を、それ程否定的に受け取ってはいなかったのだが、以外のメンバーは皆、この少年を哀れむような目つきで見ている。

皆、大川の話に対しては完全に流している様子だったし、雅史自身も彼の考えが特に奇抜な考えとも思わずらいような考えだったので、雅史も当り障りの無い感想を言うに留めていた。大川は満足げな表情を浮かべながら、点けないライターをカチカチと何度も鳴らしていた。

暫くすると直が普通人宮川に彼自身の自殺志望理由を聞いてもらったらいよいよと言いつつ、雅史も同調した。宮川は相変わらず惚けた口調で照れ笑いをしながら、彼自身の自殺志望理由を少しずつ語り始めた。

「人間には生だけでなく死にも本能があると思います。生きる事も死ぬ事も苦しみを伴います。けれど多くの人々は苦しみのスパンが長くとも生の本能と向き合い、死の本能に目を瞑る。それは人間界の主となる教育や宗教によって死に対する本能の存在が見えづらくなっているからでしょう。

人間は生きている間、個人差はあるにせよ幾度も死にたいと切実に感じる事があります。

多くの場合それは逃避願望から来るものであり、人はそのタイプの逃避願望を極端に嫌います。けれども生きている事も又、逃避願望から成り立つものであると言えるのです。

何故人は自殺をするのかと言われた時、多くの人間は現実の苦しみから逃れる為と答えるでしょう。まれに理想を求めてと言う者も居るかも知れない。では人は何故生きるのかと言われた時、どういう答えが返ってくると思いますか？ 死という未知なものに対する恐怖心が強いから？ それは死からの逃避じゃないのでしょうか？

生きる本能が強いから？ その本能はいつ感じますか？ 性欲や食欲等と異なり死にたくないと思う時に初めて、意識するものではないのでしょうか。

僕は生の逃避が死であると同時に死の逃避も又生であると思うのです。

死が痛みや不安、苦しみ、謎という恐怖感を伴うのと同様に、生も又痛みや不安、苦しみ、謎を伴います。対局する二つの本能は意識下で常に闘ぎ合っていると思うのです」

雅史は宮川の話聞きながら、自分の中にある死の本能とやらを感じようとしていた。

宮川の話は分からなくなかった。ただ彼の意味する逃避という言葉の意味合いが、何処か雅史の考えているそれとは異なるような気がしていた。

宮川はそんな雅史の表情を感じ取り、不安げな表情で自分の言っている事は雅史にとって、まだまだ子供の考えそうな事かと尋ねてきた。雅史は慌てて否定し、宮川が言った話の内容を今想像してただけだと答えた。

宮川は安堵のため息を吐くと、自分が自殺願望を持っているのはそのせいであり、自殺願望を抱く事も自殺をする事も特別な事では無いのではないかと話を纏めた。

飯田がすかさず、相変わらず素敵な考えだと宮川を褒めちぎった。ふと直に目をやると、彼女は下を向いたまま黙々とフレンチフライを食べていた。

店を出たのは空に幾つかの星が見える位の時間になってからだった。雅史がメンバー全員と携帯電話番号とメールアドレスを交換し、直以外のメンバー達とはその場で別れた。

他のメンバーが渋谷の駅へと戻ったのに対し、直と雅史は京王井の頭線の神泉駅へと歩いて向かった。直の自宅が駅近くにあり、雅史の家からそれ程遠くなかったので送って行く事になったのである。

店から神泉駅までは意外と遠かった。煌びやかな通りを過ぎると静かで狭い道になり、たまに遠吠えする犬の音が響いていた。

途中直がふと何かを思い出したかのように静かに立ち止まった。数歩先に出た雅史が振り返ると直は二人で何処かに寄って食事をしないかと提案した。勿論雅史は賛成した。

彼女の行き付けらしいその店は神泉駅近くにある殺風景なビルの地下にあった。コンクリートの壁が剥き出しになったままのシンプルな外観からは、何の料理を出す店なのか分からなかったが、大きめの木で出来た重みのあるドアを開けると店の中から店員の明るい声や調理の音が響いてきたのでそれ程気取った店でないことが分かり、雅史は少し安心した。

店内はとても暗かった。調理場だけは部屋の明かりを全て集めてしまったかのように明るく、フライパンの下で炎が踊っていた。席は右手がカウンター席になっており、左手が大人数用の円卓になっていた。直は慣れた様子で店員に身振りでも合図をした後、雅史をカウンターの一番奥へと案内した。

カウンターは込み合っており、雅史は二人の会話が調理人や隣の席の人に聞かれるのが嫌だったので乗り気でなかったのだが、実際座ってみると席と席の間には気の利いたスペースがあった。店にはメニューの紙らしき物が置いてお

らず、店員は当たり前のように小鉢に入った前菜の和風サラダと水を二人の前に静かに置いた。

雅史が落ち着きなく周りを見回していると、直がその店にはメニューが無く、その日その日に用意した料理を同じ値段で客に出すのだと言った。

雅史が落ち着いたのを見ると直は少し改まり、今日一日付き合ってくれた事への礼を述べた。雅史は疲れた顔を急いで整えてから、こちらこそとても楽しかったと心にも無い事を言った。

「そうですか……でも疲れたんじゃないですか？ 口先人間ばかりで」

直は少し引きつったような笑顔でそう言った。

「そんな事無いよ。皆、若いのに彼らなりの視点で色々と考えているみたいだしね」

雅史は少し余裕を見せるような口調で答えた。

「彼らは死ねやしませんよ……絶対に」

突然直はそれまでより更に低い声で呟き、箸で前菜を遊び始めた。意外な言葉に驚き、心と彼女を見やると冷淡な表情が見えた。彼女が何を言いたいのか良く分からなかったのが、雅史は次にどのような言葉が彼女の口から出てくるのか黙って待つ事にした。

しかし幾ら待っていても、彼女は黙ったまま何も語ろうとはしなかった。

「僕だって、もしかしたら死ねないかも知れないさ。結婚でもして子供が出来て平凡でも幸せな日々が訪れれば、自殺願望を持っていた時期があったことすら忘れる時が来るのかも知れないよ」

沈黙に耐え兼ね、雅史はつい口が滑ってしまった。どうも昔からこういう所が天邪鬼なのである。雅史は言った後少し後悔した。

「違います。太田さんは彼らとは違います」直は強い口調で言い切った。

何を根拠にしているのか分からなかったが、強い確信を持っているかのような言い方だった。直は真っ直ぐ雅史の目を見つめながら囁いた。

「太田さんは最も純粋に近い形で自殺する事が出来ると思います。私には分かるんです」

雅史は酷い鳥肌が立つのを感じていた。彼女の言っている台詞が常識からすればとても気違いじみているというのは分かっていた。そしてそのような台詞を躊躇いもなく無表情で囁きかける直に気味悪さと恐怖心を抱いた。だが少しの沈黙の後、口を割って出たのはありがとうという言葉だった。

直は照れながら微笑むと、今日会った中で一番印象に残ったのは誰かと雅史に尋ねてきた。

雅史は宮川だなと即答した。そして他のメンバーもとても個性的で楽しい人間だったのかも知れないと付け加えた。直はやっぱりと言いながら前菜を食べ始めた。

今度は反対に雅史が直に対し、あのメンバーの中で一番好感を持てるのは誰かと尋ねた。

直は雅史を抜かせばと前置きをした上で宮川だと答えた。

雅史も彼女と同じように前菜に箸をつけ始めた。

「何故、太田さんは宮川君が印象に残ったのですか？」直が再び質問をした。

「うーん。やはり一番まともだったからかな。一番冷静というか……正直、死の本能なんてあまり意識していなかった事だしね」

「そうですか？ でも太田さん、宮川君の話を聞いている時、何処か納得のいかない顔をしていましたよ。宮川君自身も気付いていたみたいだし……」

確かに言われてみれば、あの時自分が何処かに疑問を抱いていたような気がした。だが何に対して疑問を抱いていたのか雅史は全く覚えていなかった。暫く思い出すような素振りをしていると、直は少し意地悪そうな表情をしながら雅史を観察し始めた。

「もしかして、逃避の事じゃないですか？」

直は雅史の表情を見やりながら言った。そしてその瞬間、雅史の頭の中では疑問を感じた時の記憶が蘇ってきた。

「そう、そうだよ！あの時確かに逃避という言葉が何処か引っかかっていたんだ！」

雅史は思い出せた嬉しさと、彼女の口からその言葉が出てきた事との驚きが重なって思わず声を荒らげた。

「やっぱり、太田さんは私が思っていた通りの人だ！」

突然直はこの上なく幸せそうな表情を浮かべながら雅史に微笑み掛けた。

雅史は頬が赤くなるのを感じていた。年甲斐もなく彼女の誉め言葉に舞い上がってしまっていたのである。雅史は高ぶった気持ちを必死に鎮めようと努めていた。

「太田さんは逃避という言葉のどこに疑問を感じたのですか？」

「あ、それが疑問を感じて考えている途中で宮川君が気を使ってくれちゃったもんだから、考えるのを止めてしまったんだよ」

直は納得したようなでも少し惜しむような表情をした後、真っ直ぐ雅史の瞳を見つめ、雅史に逃避という事はどのような事から逃げる事だと考えますかと尋ねてきた。

それは最近ではあまり考えなくなっていたが、雅史が大学時代に、よく考えたテーマだった。雅史は少し考えた素振をし、遠くを見るような眼をしながら逃避は自分の心を傷くのを避ける為に起こす行動ではないのかと少し気取りながら小さな声で述べた。

直は静かに頷くと直ぐ様、その心が傷つくとはどういう事かと尋ねてきた。

雅史は言われるままに次の言葉について考えようとしたが、丁度店員が料理を運んで来たので先にそれを食べる事になった。

だが雅史の頭は新たな問題の事で一杯になっていた。とにかく少しでもいい発想をして彼女を驚かせたいという気持ちが先走っていたので、料理を味わう余裕など無かったのである。

『心が傷つく……つまり心の痛み。心の痛みとはどういう時に感じるものなのか？ 信じている人に裏切られた時や物事が思った程、良い方向に向かわなかった時に感じるものである筈だ。他に何かあったか？』雅史は必死に考えたが他に考えは浮かばなかった。

結局料理を食べ終えても、雅史は自信を持って言える答えを見出せなかった。

雅史は仕方なく彼女にその旨を伝え、反対に彼女がどのようにそれを捉えているのか尋ねてみた。

直は遠慮がちに雅史の顔を見ながら、心の痛みには二つの要素があり一つは自尊心を傷つけられた時、もう一つは各々の環境の積み上げにより生じた価値観の中での倫理感や愛情が、崩されたり傷つけられたりする時に生じるものではないかと言った。

そこまで言うと直は一度沈黙し雅史の目を見た。

そして雅史が興味深げに直の話を聞いているのを確認すると、それ迄より更にゆっくりとした口調で話を続けた。

「心の痛みという言葉聞いて多くの人が想像するのは、自尊心が傷つけられるという結果に結びつく経験だと思います。例えば他人に受け入れてもらえなかった時の心の痛み、それから他人を傷つけてしまった時の心の痛み、これらは怒りや悲しみ、後悔といった言葉で表現されるけれど、この怒りや悲しみ、後悔というのは自尊心が傷つけられるのを最小限に抑えようとする、感情の擦り替えでしかないと思うのです。

そしてもう一つの心の痛みである価値観の中での倫理観や愛情からくる痛みですが、これは例えば保健所に居る犬や猫を見たときに胸が重くなるような感情や、不幸な小説を見た時にその主人公に同情して気分が重くなる時に生じる心の痛みの事です。

私は心って何だろうって考えました。それは未だに私には分かりません。でも元からあるものではなく環境によって与えられ、変化するものであり、歳を重ねる度に繊細になってゆくものではないかと思い始めました」

「そうかな？うちの母親なんて見ると、年々図太くなってゆくような気がするけどね」

雅史は冗談っぽく返した。

「そうですね、殆どの大人は年々日常の出来事に驚かなくなるし、子供に比べると細かい事柄を気にしないように見えますよね……でもそれって無意識に感情を摩り替えて自分が傷つかないようにする技術が幼い頃に比べて磨かれただけなのではないかと思うのです」

「そう言われてみれば、確かにうちの母親も面倒くさい事は年々後回しにしたり、考えないようにしたりしているような気がするなあ……」

雅史は怠惰な仕草をする母親の姿を思い出しながら同調した。

直は雅史が微笑んでいるのを見ると一段と瞳を輝かせながら体を乗り出し、雅史に顔を近づけ、雅史の目を見つめてきた。雅史は慣れない状況に戸惑いながら平静を装ったが、目を合わす事すらままならない程緊張していた。

直が再び何か重要な秘密を打ち明かすかのような口調で話し始めた。

「所で、さっきの逃避という言葉なんですが、宮川君は人間が自分の中にある逃避願望を極端に嫌うって言っていましたよね。

私は正に人はあの逃避願望を嫌うという感情から、感情の擦り替えを行うのではないかと思うんです。つまり逃避という言葉事態も逃避であり、その逃避という言葉に人間の注意を惹き付ける事によって、逃げなければ正直であると錯覚させているんです。

逃避という嘘に乗り自分は逃避しているのだと感じ苦しむ時、人はマゾ的な快感に捕われます。自分の心を傷ついたり自分のマイナス面を認めるといのは、努力が美しいと認められる現代の価値観に於いてはとても誇らしげな行為と思われるからだと思うんです」

雅史は彼女の話の頷きながら聞いていた。何となく彼女の言っている言葉の意味事態は分かっていた。だが急にそのような事を頭に詰め込まれても完全に理解する事など出来なかったし、何しろ彼女が余りにも雅史の近くに寄ってきた為、彼女のブイネックセーターの胸元が気にかかり、集中を妨げられてしまっていたのである。

雅史はふと、何故このような話を直としているのか疑問に思い始めた。

『こんな話なら、何も逢っている時にしなくともメールで幾らでも話せる内容ではないか。何故彼女はこのような話題ばかりをするのであろうか？ ひょっとすると彼女は自分が想像しているより遥かに純情で、表情には出していないが実は物凄く緊張していて、何を話しているのか分からないので、このような堅苦しい話しか出来ないではないか？

考えてみれば未だ彼女は十代だし、少し前迄エスカレーター式的女子校に通っていたのだから、教員以外に自分のような大人と知り合う機会があったとは考えにくい。子ども扱いしてほしくない一心から難しい話題を出して、大人の女というものを自分に意識させたいと思っているのではないか？』

雅史はそう思いながら、ちらりと彼女の表情を伺った。直は一方的に話してしまった事を恥ずかしく感じていたのか、頬を赤らめ、残した料理を箸で遊んでいた。

その様子を見ると、雅史の自分勝手な想像は更に膨らんでいった。

『いや、待てよ。そう言えば神泉駅周辺と言えば、ラブホ街じゃないか。行き着けとは言え、純情な女がホテル街周辺の居酒屋に男を誘うか？ 以前メールの中で彼女は現実の性行為に馴染めないと聞いていたが、彼氏の代わりにアイコラを集めるような女だ。きっとその手の好奇心は人よりも旺盛なのに違いない』

雅史は痺れるような緊張感に襲われ始めた。血液が逆流しているような感覚を覚えた。こうなってくると、彼の妄想は留まる事を知らない。妄想はどんどんエスカレートして行き、雅史の想像の中では既に、他のアイドル達と同じように直が陵辱される儀式が始まっていた。

雅史は口角が上がるのを必死に抑えながら何とかそれを現実化する事が出来ないかと考え始めた。そして、ともかく直が雅史を誘った理由を確かめなければならないと思い立った。

もし帰り際、誤って彼女を誘った際、自分の勘違いでしかなかったという事になれば、救い様の無い恥を搔く事になるし、一気に彼女に嫌われてしまうかもしれない。今後の付き合いを考慮すると、それだけは絶対に避けたい事だった。

何かさり気無く話題を摩り替え、彼女の気持ちを確かめ易くなるような雰囲気を持っていけないものかと、アルコールと興奮と緊張とで朦朧とする思考を必死に回転させながら考えを廻らせると、彼女が最初に言った台詞が思い出された。

「そうそう、そういえばさっき僕以外のメンバーは死ぬ事は出来ないって言ったよね？ どうして彼らが死ねないと言い切れるの？」

その話題は彼女が自分をどのように思っているのか確かめるのには最適のように感じた。

雅史は直の口から熱っぽい告白らしき台詞を聞くことが出来るだろうと思いながら胸を躍らせていた。

ところが直の反応は雅史の考えていたものとは正反対のものであった。

「彼らは皆、死を考える時、既にその状況を仮定しているからですね。それから自殺を急がなければならない大きな理由も無い。自殺してもっと突発的なものか、若しくはもっと切羽詰って行くものだと思うんです。彼らのように特別な理由も無く自殺をしようと考えている人間の中に、その考えを全うして自殺出来る人なんて殆ど居ないと思うんですよ。

それから死考会っていう集まりは本来、自殺や死についてお互いの意識を確かめ合う集まりであって、明日にでも死のうと考えている自殺志望者の集まるような所でも、互いの傷を舐め合うような集まりでもないと思うんです。

まあ本当に自殺をしようと真剣に考えている人間が、オフ会なんて参加する訳が無いと思うけど。それから太田さんが何故彼らと違うのかって所ですけれども、御免なさい。これは単なる勘なんです。何の根拠も無いんです。ただ何となく思っただけ……」

力が抜けたような口調から、雅史は直が話の腰を折られた事に対して苛立ちを感じている事を察した。はっとなり、彼女を見やると、少し前まで光を放っていた瞳は光を失い悲哀に満ちていた。

雅史は血の気が引くのを感じていた。何とか彼女を再び楽しませようと彼女が興味を持ちそうな話題をしたが、雅史の気持ちばかりが空回りする一方で、彼女の瞳に再び光が灯る事はなかった。食事が既に終わっていたのもあって、二人は殆ど無言で店を後にした。

家まで送ると雅史は言ったのだが直は丁重にそれを断り、一人暗い道を歩いて行ってしまった。

雅史は気落ちしながら彼女の後姿を見送り、そのまま重い足どりで駅へと向かった。

駅へ一歩近づく度に雅史の後悔は大きくなっていった。頭の中に浮かぶ直の悲しみに満ちた瞳は暫くの間、振り払う事が出来なかった。

家に帰り風呂に浸かると余裕が出たのか、後悔よりも直の美しさの方が蘇り、雅史の想像を再び支配した。一般的に好感が持てると言われている、明るく笑顔が愛らしく媚びた態度をとるような女性像とは異なった魅力であったが、影があるような物静かな雰囲気と顔立ちの美しさが雅史の気分を高揚させた。

そして今頃になって自分が生まれて初めて文句無しに美しいと感じる女と二人で食事を出来たという事実気付かれ、益々気分は高まっていった。

更に自分を見つめる瞳から自分に対する強い興味を感じ取った事やブイネックのセーターから覗いていた胸の膨らみ等を思い出すと、居ても立っても居られない程興奮に襲われた。

雅史は急いで浴槽から上がると、体も十分に拭かずにバスタオル一枚で部屋へと向かった。明かりを点けない雅史の部屋では、青白いモニターの光が虚ろな表情を浮べる雅史の顔を照らし、荒い息遣いが暫くの間響いていた。

想像上の直は雅史を快樂の新境地へと誘い、雅史はそのまま深い眠りについた。

翌日の朝、メールチェックをしてみると直からのメールは無かった。

雅史は急に不安に襲われた。通常であればこの時間には必ず、彼女からのメールがあったからである。仕方が無いので雅史は昨日無事に彼女が家に辿り着いたかどうか、確認を装ってメールを書く事にし、その中でさり気無く自分への印象を聞いてみる事にした。

少々女々しい気がしたが、紳士的な印象を与えるかも知れないと思い込むように努力し、メールを送信した。

だが雅史がどんなに待っても、直からのメールが来る事はなかった。

丸一日たって、雅史は再度メールを書く決心をした。ひょっとしたら重い病気や交通事故等に遭遇し、彼女の意思に反してメールが来ないのではないかと結論づけての決断であった。だがやはり返事は来なかった。

メールが来なくなってから三日が過ぎても未だ、雅史は彼女に本気で嫌われたと判断する事が出来なかった。冷静に思い起こしてみても、最後のやり取りが多少ぎくしゃくしたからと言って、彼女を傷つけるような台詞は言っていなかったし、誘ってもいない。それに少なくとも会っていた時の彼女の表情は雅史に好感を持っているように感じられたからである。

雅史は少し取り乱しながら、死考会のメンバーに直の様子を尋ねてもらおうと思い立ち、一番仲のよさそうな渚にメールを出すと会社に向かった。

渚からの返信は思ったよりも早く、雅史が会社から帰ってくると既に届いていた。雅史は少しほっとしながらメールを読み始めたが、その表情は直ぐに凍りついた。

そこには、直が死考会のメンバーと会った日の夜、自殺したと書いてあった。

告別式当日の天気はどんよりとしており、微かに霧雨が降っていた。前日行われた通夜には死考会のメンバー全員が参加したが、待ち合わせの場所に来たのは武田、飯田、渚、そして雅史だけだった。

宮川と大川は都合が悪く出席する事が出来なかった。四人は重い足どりで式場へと向かった。誰も直の話題をしようとせず、皆それぞれの思いに耽っていた。

神社に着くと昨日同様、人があまりにも少ない事に驚かされた。親族らしき者たちは既に会場の中に入っており、外来者は殆ど居なかった。記帳をしようと帳面に目をやると、やはり外来者用の記帳のページは殆ど使われていないようだった。雅史は酷い胸の痛みを感じた。記帳を終えると受付に居た若い女性が事務的に香典を受け取り、礼を述べた。

会場に入ると丁度式が始まろうとしている所だった。雅史達は息を潜めながら神殿から最も離れた席へと着席した。式は神式葬儀だった。祭壇には見覚えがある美しい顔が少し照れたように微笑む写真が飾られていた。

隣に座った飯田が落ち着きなさげにしているので目をやると、どうやら昨日上手く出来なかった玉串の供え方を練習しているようだった。雅史は小声で止めろよと言い、祭壇に飾られてある美しい直の写真に再び目をやった。

祭壇の近くには彼女の母親らしき女性が白いハンカチーフで目を抑えながら下を向いて座っていた。隣には父親らしき男性がおり、祭壇をまっすぐ見据えていた。

式は厳かに、そして驚く程短時間の間に営まれた。式が終わると親族以外は会場の外で待たされる事となった。雨は室内からでも音が聞こえる程の強さになっていた。

やがて泣き崩れる両親を始めとする親族に囲まれた棺が車に入れられるのを目の前で見ると、雅史の中には彼女の両親に対する強い罪悪感が込み上げてきた。ふと他のメンバーを見ると皆泣いていた。皆、彼女を乗せた車が雨の中に消えていくのを無言で見守っていた。

周りには会場で雇われた人間以外の人は居なかった。少ない出席者達は皆、火葬場迄ついて行ってしまったので、道路には妙な間隔を置いて立つ雅史達だけが残されていた。

渚が泣きながら雅史に近寄り、もう帰ろうと言った。飯田や武田も諦めたように頷いた。

「まさか本当に死んじゃうなんて……」

突然、武田がぼつりと呟いた。雅史はその言葉に無性に腹が立った。反射的に雅史は武田を殴りつけていた。武田も残りの二人も何が起こったのか分からない様子で、異常な表情の雅史を見やる。雅史は我に返ると皆をぐるりと見やり、そのまま背を向けて全速力で走り出した。

どの位走っただろう、雅史の体には感覚が無かった。黒い傘は走るのに邪魔だったので何処かに投げ捨ててしまっていた。

酸素が頭に行かなくなってきたのだろうか、頭に痺れがくる。息が苦しいという状態を通り抜けて肺が痛かった。両足の太股は既に筋肉痛になっており今にも吊りそうだった。

だが雅史は走り続けていた。走って体を痛めつければ少しは自分の罪の意識が軽くなるような気がしていた。

視界に大きな川と人気の無い土手の風景が飛び込んできた。雅史は迷わずその土手に倒れこんだ。水分をたっぷり含んだ土は雅史のスーツを泥だらけにした。雅史は泥を掴むと狂ったように顔や髪の毛に擦り付けた。

だがどんなに雅史の体が汚くならうとも痛めつけられようとも、雅史の罪悪感が薄められる事はなかった。それどころか体を痛めつければ尚の事、心は傷ついていくような感覚さえ覚えていた。

押し潰されそうな苦しみをどうにかして発散したいと思い、激しく自分の体を傷つけてみた。

『何故、これ程迄に苦しいのか？ 彼女が死の決断をしながらも微かな思想の望みを自分に託していたにもかかわらず、それを受け入れられなかったのではないかと思っているからか？ いや違う。確かに彼女は自分に対し、何かを期待していたのかもしれないし、最終的に自分の行動が彼女を死へ追いやる原因の一つとなったかもしれない。

だが彼女が死んだ直接的な原因は自分にあるのではない。彼女が生まれてから死ぬまで取り巻いてきた環境の積み重ねが、彼女にそのような考えを齎せたのだ。それに自分自身、自殺に対して否定的な考えは無いはずだ。

ではこの苦しみは彼女に恋をしていたからなのか？ 大事に思っていた相手を失ったことから来るものなのか？ 勿論それもある。実際僕は彼女に恋をしていた……だがこの苦しみはそんな純粋なものではない。もっと醜く、もっと穢れたものから来ているような気がする。

そう、もっと醜いもの……。

こんな時にも彼女の死を使って、悲しいという気持ちに酔おうとしており、その酔い方を少しでもそれらしく見せようと考えている自分が、自分の中にほんの一ミリでも存在する。その己の心の醜さ。僕は正にそれを心から憎み、苦しんでいるのだ。

僕も飯田や宮川達と一緒にいた。死を考え、いつでも死ぬると考える事によって現実の苦しみを少しでも軽くしようと考え、死への憧れを持つ事によって現実に成功している人間達に思想の面で勝っていると思いたいだけだった。

僕は認めたくなかった。容姿の良い男が持つ現実、自分が異性に好かれぬ現実を。その現実を認め、開き直り、神経が図太くなって自分の倫理観を押し曲げてまでも楽に生きてくなんてなかった。だから死をいつも意識していた。死を恐れない事が容姿の良い男を打ち負かす唯一の方法のように思っていたからだった。

だがどうだろう。僕は本当に死ぬ事が出来るのだろうか。

僕は今、直と同じように死ぬ事が出来るのだろうか。

この苦しみを理由に自殺する事は出来るのだろうか。

いや、出来やしない。

きっと舌をかむ事なんて出来ないだろう。

川に飛び込む事だって避けるだろう。

少しでも死ぬという結論に至るまでに準備をする時間が掛かるものを選ぶだろう。

ナイフを選んだり、飛び降りるビルを選んだり、飛び込む川の位置を選んだり、そうしている間自分に酔い、感情の擦り替えをし、苦しみの核心と向き合わないようになっているだけなんだ。そして時が経ち、あの時はとても悲しくて本気で死んでしまおうかと思ったと、好きな女が出来た時にでもこの苦い思い出をだしに使ってその女を口説くのだ……』

雅史の目から初めて大粒の涙が零れ落ちた。雅史はその涙を恨み、そして己の醜い性格を憎んだ。だがその醜い自

分を早く認めることによって、これ以上苦しみたくないという計算が働いている事にすぐ気がついた。

何をやっても、何を考えても、そこにはエゴがあった。自分に罪があると認めても、自分の心の醜さを認めても、そこにはいつもエゴがあった。

雅史はどうしていいのか分からなかった。ただ、たった今、自分の心を分析する事をしなければならないのだと命令する雅史の本能に忠実に従うだけだった。

どの位時間が経ったのだろうか。雨はすっかり上がり、日は落ちていた。雅史は痺れる頭で自分を見つめていた。

疲れだけが雅史の体を襲い、雅史はその感覚に安らぎを感じていた。

答えは全く見つからなかった。ただ次から次へと分かってくる事は、生きることへの執着だけだった。

雅史はゆっくりと腰を上げた。諦めがついたような彼の瞳からは、微かな希望の色が表れていた。

彼は別人になっていた。

彼はもう二度と死を尊ばなかった。

了